

藩鑑

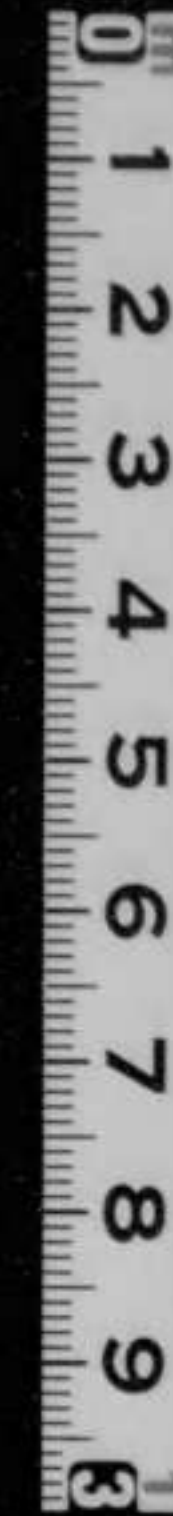
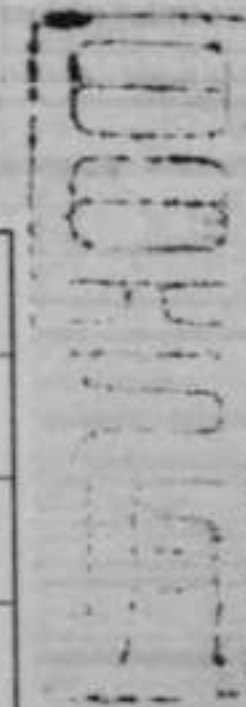
榊原

二百三十三

内閣文庫			
五 九	一 五 八 函	三 四 六 八 二 冊	和 書 類



内閣文庫		
番號	和	34682
冊數	278(233)	
函號	159	1



387

藩鑑卷之四百二十八目錄

十部六

柳原玄部大補源康政

藩鑑卷之四百二十八

柚原

武部大輔源康政の七郎右衛門尉長政の
子あり童名を亀といひ後小平太と
稱す

東照宮の仕へ奉り御諱字を楊りて
常に御例のあり是より戦場の際

ゆせたるも毎ふい必りす先手と兼
りて屢軍功とありしう天正十四年
従五位下に叙し同十八年信入國の後
上野國館林城を賜りて十萬石を領
け文禄元年
東照宮康政とて

台徳院殿に附屬し然も慶長八年
十一月近江國のうちはいして生糸料

とて別は五千石の地と降賜す同
十一年五月十四日五十九歳とて卒せり

一 永禄五年柳原小太今年十五歳とて
て名家人といふ是人異祖以来代々將門
と志郡柳原の邑に居る父七郎右衛門長政
といふ門に奉りて

清康君に仕へ則ち上野城に酒井將監忠尚
に附屬せし小平を初名龜丸といひ去る

年十二歳よりして好て三門大樹寺の勤学
一第讀と習ふ叔父大須賀一徳齋

神君は仕へて其子あり一徳齋の當年神原
長政没し嫡子長政家督と継ぎ次男龜丸兄の
許し高居しけり一徳齋の告子し一吾
俗名平太といひけり一以て龜丸と小平太と
あゝゝゝ

神君は仕へて

武徳編年集

一酒井將監より小扈從神原小平太と

権現様へ召もらひけり一水野下野守
辰家人神谷金七常と念順と咄ゆ一小平太へ
ゆめいそ言ふ事

家康公よりけり一徳仕合より小身人
あり一具足も持てけり一とて笑止ゆめ
間是より一徳仕合より一とて銀具足の少く
きれたる一願徳より一とて以後小平太件め

具足と云て高名ありそれよりあつたて
て出陣の刻い件の具足と云ふ先へもたせらる

武功雜記

一 永禄六年九月十三日石川日向が家康長澤の
松平上野の康高押鴨の松平宮内少輔親久
野見の松平次郎右衛門重吉上野下村の内反
強次右衛門一族等上野の城を軍と費す城兵
突て出戦すとき近長柳原小平太十六歳初陣

とて並切と稱す。十文字の旗を揮て勇戦を
あつたて遂に御當家の三條武部大輔康政
と稱す。是人あり

武徳編年集

一 永禄七年甲子小平太度十七歳のとき
権現様出意小平太は往く者も居附
あつたて度との事とて高名高名
は作付られ作反強次郎家源右衛門中島
右衛門作とて者二人と云ふなり小平太

後へ附させしき此是傳の初より唐座小平太
後十七十八十九三箇年のうち知行降順を
され永禄十年丁卯廿歳のときより其力
を附させられ翌十一年戊辰廿一の歳に甲
州武田信玄と

権現様作合され遠門へ歩出させられ此時
分よりや一歩の大將を小平太後へ作付られ
昂ち唐座康の字をとりられ是より康政と

中比事

柳原家譜

一 永禄十一年三月六日

神君見付より兵を發し尾後唐座四郎行田
某の氏族山村修理の指籠の演名郡堀川の城
を襲ひたれりんとて先陣を松平勘四郎
信一柳原小平太康政に命せしめゆへ今有康
政家從中唐座唐座作付家源唐座唐座曾て曰
微長去年其力の士を賜りし僅に二十歳より

て一隊の將とあり今春は古偉の一字と洋
受す毫も以て君恩海よりも深き山よりも
高き明日堀川の墨へ先登し一昔より入て
其功をあらわすし各標榜を止め腰は袖口
を用ひし作反流如く従軍と下知して康政
ありしは源左衛門右衛門作の悔へあり其より
悔月へ攻入るよりと下知し夜半より其
役をとり七日黎明柚原康政陣地無の字の

標榜を常し無切しし彈槍を携へ一昔より
入槍を合す作宗中島相隨し作反流如く
揮て従兵忽ち攻入るなり標兵も又悔裏より
へ槍を合す康政二箇不創をわたり作宗源
左衛門中島右衛門作左衛門附て康政と肩より
掛け終る標中へ進み入柚原勢頗る勵み戦
ひ標兵を斬断しし居家人小林權六史重正
時々年 柚原勢と為し先登する外松平助
二十四歳

四郎信一同三郎治郎親俊大久保新十郎忠隣
壁に附て康政にお方ら——と忽ち櫓中へ入
り退き是を隔——

榊原家傳は曰く

神君康政陣常に入浴ありて股の瘡創
一箇所の苦痛を尋ねたまひ創治さゆへそ
遺言を訊いせたまふ康政は曰く作事中将
あしけ度の勇功振群あり其責ありん事

を希ふ——言上——けさの早より二人を古

て感懐を授けらるる三門より代官の族供
奉せらるゆへ見付の店官鈴木勘右衛門は裸せ

二人は思附の地を沙汰せしめ赤色をたき

あつらふ康政は祇元日平愈——て遂に居

富家棟梁の長とある中島右衛門作元龜

二年未江門増川の役はといて戦死す

永祿細
事記

一 永祿十二年己巳遠門久能城より久野三郎右衛門

宗能

権現様へ属し奉る所は三市石部の一旗に在
候し是れあり康政は作付られ石久野郷
向う合の時分康政公忠先手を仕られぬて家
中のものとも引率し自身のもうとも又
家中の者とも言名仕れ中根台次第遠坂八
右衛門藤持才彦竹内左衛門右衛門竹尾平十郎
右の外は言名仕れとも大勢とて此度の間

畧し中々

権現様甲門信玄公と作合され遠門へ歩出
せられ駿河の氏と公駿府とあけ掛川へ
取籠られ則ち掛川の城郭と

権現様一攻攻とせられ康政公と先手に
作付られ二の九まで攻詰家中の月三時徳兵衛
様を以て言名仕れ其外を廻り仕れとも氏
と公降参りしされ掛川を去渡し氏と公い

小田原へ開きやされぬゆゑ遠坂も國平内へ是

よりして後門に信玄へ遠門に

権現様も手に入られぬ事

柳原家譜

一 元龜元年庚午歲前の相倉義系清井長政
と織田信長公と不和として出將と合戦のと

き

権現様へ居加勢の事と居頼江州城川もて
居出馬なされぬ相倉義系清井長政も城川

表へ居出られ一戦も及ひぬとき信長公作せ

られぬ天下の是非は度とされぬあゝ此等

の乱中へ居先手作付らぬと此等

家康公武邊の居家と此間居先手と居頼成

され度より一つは早速

権現様居信原成されぬ市ち康政公は居先

手仕へきより一馬意より朝倉清井も大將

大は居出やされぬとき康政公軍中精力を

此中よりこれのゆへに争ひし中よりこれの馬すゝみ一足
もさうしうらき中よりこれの間競て敵軍掛りし
伴宗源左衛門伴友成越中守右衛門伴土井右衛門
利昌馬前かけあひし四人ともは槍を合せし
而も小左衛門利昌の馬より下りまはし馬は古習
へ居りしうらきしに私に付死仕へしうらきして我馬
を康政公へ奉りしうらき槍合をしし而も康政公小
左衛門と云惜みしうらき敵を掛散ししれは

とて二箇町を度りしうらき昂ち其敵を源
左衛門宗伏せ首を取られし而も赤苗の志あり
指しもの駈来りしうらき源左衛門と長刀にて
うけられし小左衛門利昌は敵と又仕合はれて
宗伏せ首を取られし而も下りし服指を抜き
上より小左衛門と二刀突きあひしうらき
股に當りしうらきひききし首を取られし源左衛
も右の敵の首を取られし而も強敵競ひ掛

中より馬を引立てて敵の首を取られ
中へ入るも休後討たれ小吉達馬を康政公
の上に乗せられた忠を感し討た馬を
立て小吉達馬を引立て馬を退きやれぬ人の
心入比類なき忠の者なりといれども感しやれ
中務左衛門作の付託は不便なる仕合と康政
公海を流しやれぬ朝倉裏切りとてすこ
やうなるものなりと百人選み野太刀とや一回人

五寸柄長し——持せ其人殺しと横森は隠
し置やれぬて一戦終りぬと同時に

権現様居旗本へ無二無三切掛りぬうきと
中務其戦の中中居居旗本へ切かけぬに
つき忽ち敗軍仕へ——いふ所も康政公の
善力清水久三郎とやもの

権現様居馬の前よりさうして清水久三郎は
いふ——いふて廻り彼野太刀持と五人切伏

中より右百人方へ逃散し中より相倉渡井
おち敗軍いゝされぬて勝利を得しは康政公
家中の者いづれも乞廻り仕は右の小左衛門利
昌い土井大炊頭辰忠父より清康公清水久三郎
孫只今吉山大膳亮幸利公より小身より辰忠公
同上

一 勝川より酒井吉清の尉忠次先陣たり二陣に
榊原康政より酒井と始め小笠原其八郎菅沼

新八郎奥平等川を渡りて掛りけしは岸高
より第一より市は榊原より一文字は進みて上
甲斐より岸より無二より相上より急いづる
いひて相上より酒井より先は追もんとすを見
て酒井より兵後進みていふ念あり競ひ掛りて
利を得し

東照宮榊原より二のきのより以来の事ある
甲二のきよりいふの如く

けく 常山紀談
三河物語

一 甲州武田信玄公元龜二年壬申冬十二月廿二日
遠門二俣通より味方原へ押出されぬしとき
信玄公人数い三万餘兵

権現様居人数い凡八十兵ありとて居一戦あり
そいされぬしとき多勢より退

権現様居勝利と矢いせられ居旗本謝り六七
十騎とて退くせられぬしとき康政公も討死被り

へして敵陣へ入二入三と入られぬしとき家来
竹尾平十郎しりしもの

上様い西の山陰と退くせられぬしとき居守居一
町は居討死ありされ居守のよしとて馬と相
立て響も無理無勢より返りぬる則ち居旗本
へあつけ濱松の居城中より辛くして居供や
されぬしとき康政公は附者として村上社在居り
作後忠兵衛作宗源左衛門等より原田作左衛門

中根谷次第に引下り来りし處に敵廿餘をうり
暮ひ来りしそのうち一人三十百ありと先立て
来りし處と谷次第に引下りし敵討取れしと云ふ
とき佐左衛門則ち馬引返り討ちしを見て
田の畔へくみ甲の天邊よりく見ると田の畔
くもは眉間のま中裏くくわとく討ちし□
四十五間も度りし右の矢先は恐れ強ひ引
返りしと云ふ佐左衛門云々

権現様折く取寄遊されし事

柳原家譜

一 時方原退軍の後信玄必らず勝なり来り攻へ
し時後より不意に出必らず勝を得んと
思惟し戦場より出く濱松の東の方西迄退
き甲兵の来りしを待つと云ふれくも甲兵来りし
されい夜より出りて従士若干を率ゐて勝頼の
部下の陣営を襲ひ大勝の後ありし心解り
彼も役けす居けしゆへ大に糧積す我兵の

後をたらし士卒而くより来つり集まりしと
も、岡を度くして攻伐し、敵兵騷擾當を
らず、康政兵を指揮し、急し戦ひ輕く兵を
収めて、飯沼酒井忠次石川數正も謀者を以て
敵の虚实を伺ひ、むづ甲軍服佐を先鋒
し、後軍を服佐と、戦ひ疲れたる先鋒
を、支方へ分け一隊とし、度々を焼き、二の戦
を待つと、謀者歸り告ぐ、よき候

あつて軍を出さず 大三月志

一 元龜三年冬十二月廿七日信玄公濱松の城を
取巻大篝火を燒き、岡の聲を折く、まじり、これ
へ、ゆるや月夜に及ひ、信玄公来り、

あつて

権現様意として、皆く明日一戦あり、と間支
度仕へ、これあり、康政公も屋敷へ帰宅
し、これ家中の者ともを召し、これと

も大敵に討死仕る外を願ひ中に見中へ
も体成度あるは存念源吉達とて嘆ひやま
りて明日信玄公をせやされぬらん諸人殺と
れるも定めて落城は有へぬ我等切腹
の事源吉達も指立度あるも年寄母妹
一人は儀何とも仕へやうとれあきる敵を
掛やれぬ友人を利殺一家は火を掛け死
體を隠しぬやうは仕へきよや付られぬる

源吉達も夜の明と今やと待居りぬ
に信玄公人数を知らぬ大敵をやりぬき
居城中へは周章強きふへ渡りぬ所に
敵とて引ぬやぬ康政公も宅へ帰られけ度
源吉達も我等は命とぬれぬも同前よりと
て殊の外度あるはこれ信玄公八分の陣と
いかやうある儀とてぬよ

柳原家譜

一 天正元年七月長篠城を攻る武田四郎

勝頼後巻せよとて武田右馬助信豊同刑部

入道信綱と先とて信豊とい後典歴といひ宗徳

の侍大將あきとてむ五郎左衛門康政けしき水海

よとて康政とい大須賀佐古藤重中多中多

と相とて同き九月七日信綱入道と陣とつ

た森の地よとてとて散とてちやふ

と武田家の亡とてとて軍の地とて後と

こそおもひ合せけき後武田つる亡と

よとてとてとての軍と功とあつとす

りよとてとて藩幹藩

一 天正三年乙亥五月廿一日長篠合戦の武田

勝頼公三門鳳来寺表へ出勢のとき

権現様より信長公と加勢は勝頼みとて

れ長篠とてとて大將出勢とてこれと

勝頼公も鳳来寺と新長篠系へ押出

一戦のとき康政公も先とてといとこれと

信長公作せしれぬ堀と二重の堀と
付あふくく作せしきりなりて同の
上一尺廻りの木を以て二重の堀をつけ
と詰くをさうれ鉄砲の手のもの

権現様方に五百挺信長公方に七百挺
柵は掛け騎馬の付柵の前をえては置せ
られぬ間甲州勢突掛りぬと同時に柵の
内へ引取れしは先手康政公下知やされぬ

其圖は敵よりぬくも一度は引取ぬに勝類
の勢堀柵木竹の行掛り案は相違や和を
鉄砲より歩まざるありて玉にこれより甲
州家老分の歴く大形に歩死しぬとも
二重の柵と相破りぬくも二の柵より追
えて鎧を合せ康政公も言なりぬこれに
家中の者も村上弥右衛門富田三右衛門作左
孫惣作宗源左衛門柳原仁平鈴木半兵衛前後

ふつぎをり廻り仕し何きものなる仕りぬ 楠系家譜

一天正八年十月十二日

神祖高天神の叢陣——九——十九日市多
忠勝楠原康政鳥居元忠等高天神の攻口は
西の諸軍は横須賀大坂山等の陣す廿日命
あつて輕率と山林へ出——竹林をきつて城外
の榎木へ侵入廿二日兵を遣りて城外へ迫り諸
岩の榎木と接へ土居と築きしを侵入し——

次第は仕寄りと附け七重八尋は取圍む諸岩
の榎木と接し東北方橋箇谷口の野部坂火の
嶺嶺と去る事十町をく東方の麻鼻二十
町をくくり塩買坂二里餘系村七八町南方の
獅子谷口は向て万福寺十町をくく大坂山
二十餘町西の小笠原山二十四五町其餘は諸
四面へ侵入榎中の往來を以つ橋を谷より榎
兵將へ付出んとす楠系康政地理を記す

橋々谷の尾崎良の一方は竊に兵を使人橋々谷に
は寄せ戦ふ多君元忠士卒を指揮し先登す
橋兵元忠あるとあり候るより穴砲を放ち
是よりつ元忠はた刀の鞘にある家士牧又
兵隊強弓の達者あり是は命して射さ
しむ又穴砲放るを耐固ちて穴砲を止むは
しむ橋兵尾崎と井橋の阪とより横合は穴
砲を放ち左右より付んと謀り森陰は兵

を出す康政は兵不意に起つて後ろより
落し殺てつ橋兵大に敗走す表の一方は
い康政の部下伊原房助語本殿九郎重戦す

大三川志

一 天正十年二月十八日

神祖濱松を費し駿州はむらんと掛川
駅は陣し九月十九日牧野城はしつた
より諸軍は駿州金谷よりつる廿日先鋒大

須賀康高酒井忠次本多忠勝神原康政曉
天より駿州田中城をせめ大井の郭を破り
首八十餘級を得たり其首を悉く城下に
棄す 同上

一 天正十二年三月長久手陣前羽黒より北勝
利あり池田父子等いさゝ進み戦ひけり對
陣せり味方も卒尔と掛らす腕み合はし
き神原康政佐の兵と交へし一多の人数を

以て勝入る備を目の料て志驀に付てかゝ
勝入何と思ひけん兵をさゝめ引取けき
康政も是と慕ひし兵を収む

権現様甚長機嫌よく康政も元を仕ふ事
神愛ありと感激あり 武信神本抄

一 尾州太山の城を森氏茂吉長一忍ひ取仕り
ルアリ

権現様康政公より作付られぬ小牧

の古城へ上り狼煙を揚げしと作付しぬ
間夜中より馬の響きもあられ音も巻せり
ふれ牧を含みせ彼の城へ移りやうれぬ
同時に相手の狼煙もあけやうれぬ
権現様帛時小牧へ移りあうれぬ
翌日大岡様も尾州の月尾口栗田へ出馬
あられ相を振りぬきあうれぬ陣
據へやうれぬ事

柳原康政

一 天正十二年三月十七日柳原康政

神祖へ告て小牧山を守り是より康政寡兵
といへども隊伍凜然として大敵を敵て氣
を屈せず車の牧の旗を立て是を待ちす

大川志

一 天正十二年四月六日柳原康政栗田の敵の諸

陣へ書簡を授け秀吉の信長の恩遇を蒙り
とて源厚とあはれ世に知らしめる者ありと云

も秀吉自主の志を覆し奸謀を巧み信雄
と隙を生じ遂に干戈を交へ君臣の儀を失
ふこと天下の人を悟み誰れ誅せざらん
今諸の將士も是は其力に非ざるに
陷るけのことも篡逆の長に属すや速うは
先承を改め信雄へ忠勤を励むことあり
秀吉是を聞き大に忿怒し諸陣へ柳原の
首を得て吾人を快くす者ありいふ後

任せ賞禄を授けしと合す

大正三川志
常山紀略

一 大岡横三郎中前言秀次を大将とあはせ
五万の人数にて岡崎の城へ押掛らるる時
辰よく龍泉寺より出張居座る其並に小
畑中城居座る是は尾張の内府信雄公
の内訖持めて居座りけり而もて康政公先
一番は押詰二番は火頭賀五郎右衛門左水野
数兵衛殿三番は井伊兵部少輔殿尾州内

府の用人数

権現様居旗本より忠度此下は康政公五郎
右衛門殿惣兵清度は三人のちのち合戦
より一よりして三好度人数を西へ追ひけ
東へ追返り火水よりありて大に戦ひやれ
康政公五郎右衛門殿惣兵清度命を
あつて乞廻りいふはたつてさやされ
間大軍よりありて小勢はたつて押えられ

三好度の人数忽ち敗軍より追討より
数多の討取やれ

柳原家譜

一 長久寺の役は柳原康政とけしめ諸将等
三好秀次と佐々木破り敗兵を追ひ極秀政
兵九千を以て洞水と希りて岩崎山の
尾崎は二段は佐々木令て曰く思ふは敵勝
よりありて敗兵を追ふは必らず隊伍揃
へりてす敵を十間より内へ引受け能

得得て是とうつて一隊士一人をうへに
百石の地を以て賞すてて輕卒を前へ
使へ火炮をうへて嚴重は是を待つ康高康
政等是を見て隊を留めて進まず秀政兵
を指揮して山上より突襲し數軍ひし
し奮戦す我兵寡く殊に長途追うけ
しゆに隊卒とも疲勞甚しし秀政軍
をさうりて事なへし是は異の方より長可

勝入る兵二万とあり一齊に來る秀次の
敗兵も昂ち返りてともに戦ひ我兵
終に追返され猪熊系熱田石拂邊まで敗
走し中多康重水野忠重は敗兵を長久手
の方へ追ひしし康高康政等敗せしと聞き
則ち軍を返す忠重も言ふ所は左に敵の
挙動を伺ひ居しし康政は土村上原右衛門左
衛門の地を監察し戦死すの憐れ此に

あるへ——とら忠重これと聞て曰く是
れ元より武名ある士ありと云ふは今僅
七八騎も過ぐる從兵を以て大軍に向ひ死せ
んこと何の益あるんこれ足中の例であら
うと云ふ思ふは我君及び信雄君哉——
あるは此は忌陣ありせと云ふ——其とき
及んで戦功を抽んである備の忠臣たるへ
——村上は例は依——と云ふ——康政もいふ
康政もいふ

今少——兵を引退——と云ふ——とて望み
見ると敵兵雲のごとく掩ひ来る村上馬を飛
せ康政も隊へ行——と云ふ——康政も大軍
も僅五六騎の脱士をとりて馬上自ら薙刀を
振ひ響き返——且戦ひ且退——康政も大刀
を収め馬上より長柄の槍を以て薙拂ひ突
刺す敵將総軍の敵——兵を退——と云ふ——
も大軍大急と追ふ我兵甚危張るる種板

常陸の忠文有泉の学岡部長盛等の勇士
五十騎をうり来りて助け身命を顧みず
能返し血戦す康政康高遂に危を免る
兵を退けりて神原康政岡部長盛等由旗
本を来りて降す

神祖康政の手をとりて我既に出等
敗すといふ聞きぬとくれいとも存亡を
知らず中々安んずりてあつに今汝等

命を全しりて歸り来りていと悦び
堪はずと涙を掩ひせり康政令の辱を降
附し且告なりて曰く長等三好秀次大
兵を寡兵にて一戦に伐破り堪秀次大兵を
率ひ来りて勦め彼に壯兵ありて我
兵に疲勞しといひ寡兵あり堪々為る鬼に
られ敗軍す大須賀康高水野忠重等の衆
兵を向ひて奔る長も死を決して戦はん

欲すあられども居旗を見て死すゝを忍び
す恥と悟て是より来りて降参りし事
告ぐ左右の輩是を見て旗は君臣合一のこと
ありと歎息す康政長盛敗卒隊兵を従へ
て麾下に侍ます

大正川志
四戦記

一 長久手市勝利の後小幡の要害へ馬を入
られけりしとき乍候と出され龍泉寺のく
敷を見切らせ治りんと作ありけり柳原

入らざる儀ありと留かけり是は乍候の
侍秀吉と大軍と見て帰るてい味方の氣を
くさぬへしと上重て合戦を挑み給ひん
為のあらしと入れ入らざる事との心得あり

しとぞ 新橋舊松岡書